

博士学位論文

即興ダンスにおけるカップリングと
動作選択可能性拡大・自己治癒に関する研究

鈴木信一

立教大学大学院 文学研究科

目次

目次	I
1. 序章	1
1-1. 目的	1
1-2. 背景	2
1-3. 方法	2
1-4. 先行研究	4
2. ハイデガー哲学による即興ダンスの実存論的検討	6
2-1. 態度における実存的性格	6
2-1-1. 存在様態と決意性／決断	6
2-1-2. 情態性／気分による規定	14
2-2. 動作そのものの実存的性格	17
2-2-1. 理解と語り	17
2-2-2. 他者存在と共振	21
2-3. 実存的性格における意義と課題	24
2-3-1. 意義	24
2-3-2. 課題	26
3. メルロ＝ポンティにおける身体運動論	28
3-1. 身体図式と包み合い	28
3-1-1. 感覚と運動	28
3-1-2. 身体図式と運動	31
3-1-3. “いま・ここ”と運動	33
3-1-4. 他者と運動	36
3-2. 「肉」と絡み合い	38
3-2-1. 「肉」という概念	38

3-2-2. 「絡み合い」という運動	4 1
3-3. 身体運動論における課題と展望	4 2
3-3-1. 課題	4 2
3-3-2. 展望	4 6
4. 即興ダンスにおける動作単位産出システムの分析	4 7
4-1. 動作単位の産出システム	4 7
4-1-1. 動作単位産出システムの設定	4 7
4-1-2. 産出システムにおける恒常的／選択的変数の設定	5 0
4-2. 恒常的に連動する変数の考察	5 2
4-2-1. 注意	5 2
4-2-2. 運動感覚・内部感覚の感じ取り	5 5
4-2-3. 予期	5 6
4-2-4. 身体・運動イメージの形成	5 7
4-2-5. 配置	5 8
4-2-6. 寸法・隔たり・方向の調整	6 0
4-2-7. 反復・リズム化	6 1
4-3. 選択的に連動する変数の考察	6 3
4-3-1. 呼吸の調整	6 3
4-3-2. 皮膚感触の感じ取り	6 4
4-3-3. 表象イメージの形成	6 5
4-3-4. 眼差しの焦点化と分散化	6 6
4-3-5. 情態性／気分	6 7
4-4. 変数の選択・連動と他変数の再編	6 9
4-4-1. 「呼吸の調整－表象イメージ」の選択・連動と他変数の再編	6 9
4-4-2. 「皮膚による接触－表象イメージ」の選択・連動と他変数の再編	7 0
4-4-3. 「眼差しによる感触－表象イメージ」の選択・連動と他変数の再編	7 1
4-5. 他者とのカップリング・システムの産出と持続	7 3
4-5-1. カップリング・システムの産出	7 3

4-5-2. カップリング・システムの持続と強度	74
4-5-3. カップリング・システムのリセットとデカップリング	75
5. エクササイズの様相	77
5-1. 準備	77
5-1-1. 呼吸の調整	77
5-1-2. 気づきによる脱力	77
5-2. 即興ダンスにおけるカップリング・経年事例	80
5-2-1. Aさん（小児麻痺：女性）	80
5-2-2. Bさん（自閉症：女性）	84
5-2-3. Cさん（自閉症：男性）	90
5-2-4. Dさん（自閉症：男性）	93
5-2-5. Eさん（自閉症：男性）	95
5-3. 即興ダンスにおけるカップリング・個別事例	98
5-3-1. Fさん（ダウン症：男性）・Gさん（自閉症：男性）デュオ	98
5-3-2. Fさん（ダウン症：男性）デュオ	99
5-3-3. Gさん（自閉症：男性）デュオ	100
5-3-4. Hさん（ダウン症：女性）デュオ前半	102
5-3-5. Hさん（ダウン症：女性）デュオ後半	103
5-3-6. Iさん（ダウン症：女性）デュオ	104
5-3-7. Iさん（ダウン症：女性）デュオ	106
5-3-8. Jさん（自閉症：男性）デュオ	107
5-3-9. Kさん（自閉症：男性）デュオ	107
5-4. 事例の考察	109
5-4-1. 自己治癒の現れの検討	109
5-4-2. カップリング・システムの立ち上げに係る課題と解決の方向性	114
5-4-3. カップリング・システムの持続・解消・再生に係る 課題と解決の方向性	114
6. カップリング成功についての方策と効果	117

6-1. カップリング・システム立ち上げのための技法	117
6-1-1. 接触	117
6-1-2. 模倣	119
6-1-3. 隙間づくり	120
6-1-4. 擬態	121
6-1-5. 反復	121
6-2. カップリング・システムにおける触媒変数のタイプ	122
6-2-1. 誘導・応答	122
6-2-2. イメージ・役割設定	123
6-2-3. 同調	124
6-2-4. 共振	125
6-3. 相手の動作に介入する部分の見定め	126
6-3-1. 動作／眼差しの尺度への気づき	126
6-3-2. 緊張状態や気分への気づき	127
6-3-3. “できる”動作への気づき	127
6-4. カップリング・システムの持続および擬似カップリングへの気づき	128
6-4-1. 持続へ向けた気づき	128
6-4-2. 擬似カップリングへの気づき	129
7. 即興ダンスと自己治癒の接続	131
7-1. 恒常性維持における自己治癒	131
7-2. 自己肯定による自己治癒	133
7-3. 自己表現としての自己治癒	133
7-4. 動作選択可能性における自己治癒	136
8. 結論	139
註	143
参考文献	151

論文の要約

舞踏セラピーでは一定の治癒効果が認められてきた。それは「開かれた踊り」ができている、と舞踏セラピーでは表現される。本論文は「即興ダンス」による舞踏セラピーの効果の因果関係とその実現の諸条件を明らかにする試みである。

「即興ダンス」とは動作を産出する以前に、恣意的に動作のパターンや展開を設定することなく、さらにいかなる様式にとらわれることなく、その都度直面する状況に応じ自ずと動作を産出するダンスの仕方である。

従来のダンスセラピーの治癒理論はコミュニケーション論、ユング派理論、ダンス機能論、などに基づく研究がなされてきたが、それらの多くは外部観察による研究であり、踊り手自身の変化を捉えられない憾みがある。本論文は踊り手の経験を内省的に記述する立場を取り、筆者自身による「即興ダンス」の実践と観察にもとづき、実践内容の記述と分析を行い、他者とのカップリングにかかわる実践内容を記述することから自己治癒への因果関係を探る。そのために即興ダンスにおける、①動作の産出構造のモデル化、②他者とのカップリングの産出構造のモデル化、③カップリング成功の方策と効果の提示、④即興ダンスと自己治癒の関係の提示を目標とする。

筆者は自閉症、ダウン症や知的しょうがいといった特徴を持つ人々と「即興ダンス」を実践し、自己の身体内部に生じた運動感覚・内部感覚の感じ取り、注意の移行、気づきの発生、表象イメージの発生、力の入れ具合の変化、移動の経過、自己の動作のおおよその輪郭、デュオ、トリオにおける他者の動作の輪郭、他者との隔たり、カップリングの仕方とその強度、カップリング・システムの産出、持続の仕方とその経過を記述し、その記述内容を実存論およびオートポイエーシス論において分析を行い、「即興ダンス」の実践内容を明らかにし、他者とのカップリングを成功させるための方策を導き出すとともに、「即興ダンス」の実践と自己治癒の因果関係を明確化する（以上序章）。

第2章では、即興ダンスを内的に反省する立場から、踊り手の実存的性格に注目し、ハイデガーの論究に基づき、治癒には自己の本来の存在を取り戻すことが含まれるという仮説を立てる。仮説に基づき即興ダンスの持つ実存的意義と身体運動やカップリングの分析、モデル化に求められる課題を明らかにする。『存在と時間』における諸概念から他者との関係の作り方、気分的存在、本来のと非本来の二つの存在様態を行き来する自己、実存的決断を必要とする自己などの概念を舞踏のプロセスに有効な説明図式として採用する。また、後期著作の『哲学への寄与』からは原初的な思索の下に、上記概念の生成が、慎ましき、予感といった気分として捉えられ、生命感あふれる気分、自由な開かれた気分を生み出すこと、さらにそれが「内的緊迫性」を伴うことから動作産出の調整機能につながること、などを説明図式として採用する。『存在と時間』での他者との実存的連動は『哲学の寄与』では存在に開かれて可能になると説明され直され、ハイデガーの存在論の概念を組み

合わせるにより舞踏セラピーの成立過程のモデル化の手がかりを得る。

第 3 章では、メルロ＝ポンティの身体運動論についての論究を検討する。まず『知覚の現象学』で提示される身体図式という概念に基づき、地と図の構造からみた視覚運動、接触運動等における身体運動および身体の空間性の包摂関係を検討し、さらに同書で提示された「運動の表象としての思惟」、「運動能力としての身体自身によって保証された一つの結果の予料または把握」、「ひとつの〈運動投企〉」、「ひとつの〈運動指向性〉」といった動作産出の調整要因を検討する。そして即興ダンスの身体運動の点から、身体運動の潜在的可能性、他者との連動の潜在的可能性について確認する。さらに後期の『見えるものと見えないもの』に提示された「肉」、「絡み合い」の概念を運動主体の固有性の確保に重点を置いて理解を試みる。メルロ＝ポンティは、自己の視野における「肉」という潜在的可能性のうちに巻き込まれつつ、自己の位置移動はその遂行可能性のうちに位置づけられるという具合に、見える世界と運動企投の世界が表裏一体の形で同一の存在を覆い、その可能性に自己の身体を開く、とする。以上の検討、理解から自己と他者とのカップリングにおけるメカニズムをモデル化するための課題、方向性を明らかにする。

第 4 章では、即興ダンスの動作産出システムのモデル化を行う。動作は自発性・不可逆性・不安定性を持つ、反復する動作単位である。動作単位はその産出以前に、動作単位を産出するための、変化しうる度合いを持つ要素である変数が複数かつ並列的に連動されることにより産出される。この過程を繰り返すことにより動作は形成される。本論文では変数を「恒常的に連動する変数」と「選択的に連動する変数」に分ける。前者に、①注意、②運動感覚・内部感覚の感じ取り、③予期、④身体・運動イメージの形成、⑤配置、⑥寸法・隔たり・方向の調整、⑦反復・リズム化を、後者に、①呼吸の調整、②皮膚感触の感じ取り、③表象イメージの形成、④眼差しの焦点化と分散化、⑤情態性／気分を仮説設定する。それと同時に、他者とのカップリング・システムのモデル化をも仮説設定する。他者とのカップリング・システムとは動作単位の持続とともに、他者の動作に自らの動作が入り、自らの動作に他者の動作が入り込み、連動が持続することにより、他者との間に立ち上がるころのものである。他者とのカップリング・システムは自己と他者を触媒する変数を持つ。この時自己にとって他者は環境であり、他者にとって自己は環境となる。そして両者は触媒する変数の質やその度合いを手掛かりにしつつカップリング・システムを更新つまり産出し、環境の変化に応じて同システムを持続あるいは解消する。解消においては、自己と他者の間で持続していたカップリング・システムから、それとは異なる触媒する変数を持つカップリング・システムへと移行するリセット、または自己と他者の間で持続されていたカップリング・システムを終了させ、他者が円滑に新たな相手とカップリング・システムを立ち上げることができるよう差し向けるデカップリングという選択肢を仮説設定する。

第 5 章では、筆者による自閉症、ダウン症や知的しょうがいといった人々との即興ダン

スの実践例の内的記述を取り上げ、第4章で設定したモデルを使用して考察する。内的記述にあたっては、デュオ、トリオの組み合わせにおいて起きる、カップリング・システムの産出と維持、消滅の過程、複数のカップリング・システムの分離と統合の過程、各参加者の動作の変化、情態性／気分の変化、運動感覚や身体内部と皮膚における感触の状態と変化に重点を置く。記述した事例については、舞踏セラピーとしての効果が経年的に現れ出た事例、個別のカップリングの成功事例と失敗事例に分け、それぞれにおける動作の選択肢の変化、必要とされる気づき、カップリングと自己治癒の関係等を考察する。

第6章では、第5章の考察を踏まえ、他者とのカップリングを成功させ、動作の選択可能性、他者との連動可能性を拡大し、自己治癒の促進を可能にするメカニズムと諸条件を提示する。カップリング・システムを立ち上げるための技法として、上記事例および筆者の実践経験から、①接触、②模倣、③隙間づくり、④擬態、⑤反復、を見出す。そして立ち上げられたカップリング・システムから、①誘導・応答、②イメージ・役割設定、③同調、④共振、という自己と他者を触媒する変数を見出す。そしてカップリング・システムの産出を可能にすべく他者の動作に介入する手掛かりとして、①動作／眼差しの尺度への気づき、②緊張状態や情態性／気分への気づき、③他者の「できる」動作への気づき、が求められることを明らかにする。そしてカップリング・システムの持続における、連動の強度の過剰な増幅、擬似カップリング（他者への見せかけとしてのカップリング）の発生という注意事項も取り出す。

第7章では、第4章から第6章までの考察に基づき、即興ダンスの遂行と踊る者の自己治癒のつながりを考察し、動作産出システムのメカニズム、他者とのカップリング・システムのメカニズムを用い、①動作選択可能性の拡大、②恒常性の維持、③自己肯定、④自己表現、が自己治癒につながることを明らかにする。動作の選択肢をひとつずつ増やしていく、という学習を繰り返すことで自在さが生じ、その選択肢はきめ細かく丁寧に働くようになり、他者との連動可能性は向上し、環境への適応力も増す。それにより、自己の恒常性の維持、つまり「変化はするが相対的に定常的な」安定した状態を確保し、確保に失敗しても次の動作の選択肢を選択、あるいは作りだす試行を通じて学習を進めることができる。他者とカップリング・システムを産出し、その連動のうちに動作産出を繰り返すことは、「否定を含まない偶然性」という恣意性を持たないという意味での必然性において自己という存在を生成することであり、それは「存在を欲する」自己という「生」を肯定することなのである。そして動作の選択可能性がほとんどない状態から少しずつ拡大していく過程、動作産出における各変数がきめ細かいものになる過程は学習であり、自己治癒であり、自己表現そのものであることを導き出す。

第8章では、動作の産出システム、他者とのカップリング・システム、即興ダンスと自己治癒の関係について総括するとともに、以上各点における実存論の有効性を明示する。